

# 『エルクウ・キラー』

著作 a s h

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

5 A、欺瞞（ぎまん）：人目をあざむき、だますこと（）

長い髪に帽子らしきもの。

…それは原画集にあった初期設定スタイルの、千鶴さんだった。もちろん季節が少し違うので袖なしじゃないが、実はこの格好も見えてみなかった。初期設定と言えば、髪を後ろで一本に編んでいる初音ちゃんも実は好きだったりするのだがそれはこの際関係ない話だな。

「あ……」

俺が声を掛ける前に千鶴さんは俺の姿に気づいたらしく、こっちを向いて小さく声を上げた。

何となくその表情を確認するのが恐かったが、こうなってはもう開き直るしかない。

「…千鶴さんだけ？」

俺が恐る恐る尋ねると、千鶴さんは

「遅かったですね、耕一さん」

と優しく微笑んでくれた。

その言葉には、寒気も何も感じやしない。よかった。

「ごめん、昨日の約束だったのに…」

と俺が切り出すと、千鶴さんは表情を変えずに、

「いえ、多分大学のお友達と一緒にじゃないかなと思ったんです。久しぶりに行ってそれでお別れと言うのもさびしいですしね」

と言ってくれた。そうか、その辺の事情はさすがに分かってくれたんだ。

「…うん、実はその通りなんだ。連絡すればよかったんだけどね…」

「いいえ、気にしないでください。そもそも突然行くって言い出したわたしたちが悪いんですから」

「そ、そんな事ないよ、千鶴さん。九時って言うておいて、すっぽかした俺の方が悪いに決まってるさ」

「…それじゃ、お互い様と言う事しておきましょう。ね？ 耕一さん」  
う…。

千鶴さんにそんな風に言われると、何も言い返せなくなってしまう。

「う、うん、分かったよ…」

「それじゃいいですね？」

千鶴さんに押し切られた感じもするが、今はそんな事をずっと廊下で展開させてる訳にも行かない。

「まあ、とりあえず入ってよ。あんまり片付いてないけど」

俺はそう言いながら、自分の部屋の鍵を開け、千鶴さんの中に案内した。

「え、ええ、それじゃ…」

すると、千鶴さんは少し躊躇いがちに、入ってきた。

「どうかしたの？」

「い、いえ、わたし初めてなものですから…」

……。

……何か知らないけど一瞬、すごく背中がかゆいような気がしたぞ…。

ま、いいか。

「ちょっと散らかしたままあっちに行っちゃったから、あんまり生活感もないけど、お茶ぐらい入れるからさ。そのテーブルの周りにでも座ってよ」

奥の部屋に千鶴さんを案内して、俺はおもむろに台所に向かおうとした。

「そ、そんな、いいですから！ わたしがやりますよ、耕一さん」

……いい？

って、待て待て。柏木家の食器破壊魔であるところの千鶴さんを台所に案内したら…

それはもう目も当てられない状況になるのは、必至だよな。

「い、いやあ、千鶴さんはお客さんだから、じっと座っててよ。ね？」

慌てて立ち上がろうとする千鶴さんを、俺は両手で制止する。

「そんな、お客さんだなんて…大げさですよ、耕一さん」

「いやいや、散々待たせたあげくに、お客さんにお茶まで入れさせたら、この柏木耕一、一生の恥だよ」

我ながら大げさだな。でも、千鶴さんみたいに生真面目な人には、多少大げさな理由をつけてやった方が無難だ。現に、千鶴さんはクスツと小さく笑うと「分かりました。それじゃ、お願いしますね」

と言つて、また座り直してくれた。ちなみに座り方は正座だ。

「それじゃちよつと待つてね」

そして俺が台所に入り最初にやった事はと言うと、急須を探す事だった。

おつと、探してる間にお湯を沸かさなきゃな。

そう思つてコンロの上にあつたやかんを手に取り、水を入れようと思つてふたを開けたら、

「げげっ…」

やかんの底には何やら黒いものがこびりついていた。

カビ？ 多分間違いないだろう。恐らくはやかんに水が入つたままだったに違いない。

ちくしょう、これじゃ洗つてもすぐにはカビ臭さが抜けないぞ…。

ちよつと情けないが、お茶を出すのはやめておこう。確か冷蔵庫に買い置きの缶コーヒーがあつたはずだ。

「ごめん、千鶴さん、茶っ葉が切れちゃつてさ。缶コーヒーでいい？」

缶コーヒーを二本冷蔵庫から出して、奥の部屋に入ると、千鶴さんはさつきと寸分違わぬ姿勢のまま、

「え、ええ、構いませんよ」

と言つた。

？ 何か千鶴さんの様子が変だ。

何となく顔を赤らめると言うか、何か気になる事があるようで、ある一点をちらちらと見ては、またさっとうつむいては、を繰り返している。

はて？

「千鶴さん、どうかしたの？」

「い、いえ、何でもありません…」

何でもありませんと言う表情じゃないな。

恥ずかしそうにしていると言うか…。

恥ずかしそう？

…まさか……。

千鶴さんの気にしてる一点を、彼女の視線からつーっと追いかけてみると、その行き着くところにあっただのは……大学の悪友がくれた日本の山だった。

「あ！ そ、それは俺のじゃないよ、友達が勝手に置いてったんだよ！」

慌てて隠そうとするが、それはもう手遅れだ。

「い、いえ、別に悪いとは……」

「ち、違うんだって！ 俺は別にどうでもよかつたのに、そいつが無理矢理置いてちゃつたんだよお」

これは洗ってない洗濯物見られる以上に恥ずかしい。ま、そんなのを気にしない関係だったら、笑ってすませられるのに…。

「耕一さん」

不意に千鶴さんの語調が変わった。

「ああああ、誤解だつてばあ」

それに聞わず、俺は相変わらずごまかそうとしている。

「耕一さん、落ち着いてください」

「分かってくれよう、千鶴さん」

もはや、千鶴さんが何を言っても無関係だった。

「耕一さん！　しっかりしなさい！」

ビクツ！

…一瞬で俺は言葉を失った。

「……よく、分かりました。やっぱりあなたはあの時様を襲うつもりだったんですね？」

「……」

違うと言いたいの、俺の口は動いてくれなかった。それまでとは全然違う千鶴さんの雰囲気を押されて…。

「わたしは悩んでいたんです…。あなたも健康な男性である以上、いつかはあんな事が起きるんじゃないかって…。わたしが今回無理を言って、こっちに来たのは、あなたの女性関係を確認するためだったんです」

女性関係を確認って一体…。

「もしこっちですでに恋人と呼べる人がいたなら、無理に柏木の家に来る事はないと思っ  
たんですが…」

そんなのいないって。

俺は……千鶴さんたちのそばにいたいと、心底思ってるのに…。

「この様子では、そんな人はいないようですね」

だからあ、いる訳ないでしょ！ 女友達ってのはいくらかいたけど…。

「…でも、だからと言って、欲求不満の解消に妹たちを犠牲にしたくはありません」

おーい、千鶴さん。何だか人をケダモノみたいに言ってるない？

俺は梓を襲おうとしたんじゃないんだけどな…。

ふと千鶴さんの表情が、それまでの堅い表情から急に崩れていった。

「…で、ですから…、そ、その…」

喋り方も急に訥弁になっている。

な、何だ、この展開はあ！

もしもじとして、うつむいている千鶴さん。

さっぱり訳が分からない俺。

「あの………わたしでよかったですら………」

へ？

なに？

千鶴さん、何を言ってるんだろう？

「で、ですから………構いませんから………」

……読めたぞ。

さっき感じた背中のごそばゆきは、これを予見していたに違いない。

となると、次に来る展開は…。

「こ、耕一さん……」

千鶴さんは恥ずかしそうに俺の名を呼んだあと、目をつむって……。

…やっぱり。

ど、どうしたら、いいんだろう？

据膳食わぬは…って言うし、せっかく「どうぞ」って言ってくれてるんだからもらわない手はないだけだね。ただ、みよくに背中が…。

我ながらあまりの恥ずかしい展開について行けないぞ、さすがに。

「あの…千鶴さん？」

俺が呼ぶと、千鶴さんは一瞬ピクツと体を震わせたが、その体勢には変化はない。

一体どうしろってんだ…。

困ったな…。

どうしよう…ずっとこのままって訳にも行かないし。

「ほ、他のみんなが来たりしない？」

俺は時間稼ぎのつもりで、苦し紛れに千鶴さんに尋ねた。

すると、突然千鶴さんはうつむいてしまった。そして、一言。

「やっぱり、わたしじゃ駄目ですか？」

よく見ると、千鶴さんの細い肩が小刻みに震えている…。

何てこった…。

「…わたしよりも胸の大きい様の方がいいですか？ それとも年下の楓や初音の方が耕一さんの好みなんですか？」



…聞きようによつては、アブナイ質問だな、これは。…つて、そんな事を考えてる場合じゃなくて。

「違うって！ どうしたのさ、千鶴さん、何か変だよ？」

何に對して「違う」と言つたのか、自分でもよく分からない。だが、言わずにはいられない。

「…じゃ、どうして？」

千鶴さんの肩の震えは一層強くなっている。俺はそんな彼女の肩に手を置いて彼女の顔を見つめた。

わざわざ確認するまでもないが、千鶴さんは泣いていた。俺のせいだ。俺があまりに情けないんで、千鶴さんを泣かしてしまったのだ。

ちくしょう！

…女性の涙にややつぱり勝てない。

まして……

好きな女性の涙になんて、勝てっこないに決まってるじゃないか…。

「千鶴さん…ゴメン……」

俺はそう言った後、千鶴さんをギュッと抱きしめた。

そうだ。それ以上の言葉はいらない。

今の俺に出来るのは、千鶴さんをしっかり抱きしめる事だけなんだ。背中がかゆいとか恥ずかしいとか、そんな事は言つてられない。

「耕一さん……」

千鶴さんもそんな俺の気持ちをつかってくれた……と思う。

切なそうに俺の名前を呼んだ後、俺を強く抱き返してくれる。

こんな展開なら、そのまま一気に流れて行ってもおかしくはない……。本編なら間違いなくここで音楽が変わっているだろう。

俺よりも年上で、柏木家の家長で、鶴米屋グループの会長で、まじめで一途な性格で、ちょっとドジで、可愛らしい千鶴さん。そんな彼女の華奢な身体を俺は抱き締めているのだ。そこには、時折見せるお姉さんらしさの片鱗もない。

しばらくの間、そうして千鶴さんを抱き締めたままじっとしていた。そうしないと千鶴さんの身体が崩れ落ちそうな感じがしたから。

「あの…耕一さん……」

ふと千鶴さんがつぶやくように言った。

「なに、千鶴さん？」

俺もそれに優しく答える。

「…あの……妹たちもまだ来ないと思いますから……」

ためらいがちにそれだけ言うと、千鶴さんは真っ赤になつてうつつむいてしまう。

それってつまり？

千鶴さんの言った内容と態度から、本音を探ると…「やるなら今です」ってことなんだろうか？ って、おい、何をやるってんだよ、俺はよお？

「千鶴さん？」

「そ……その……」

俺が名前を呼ぶと、千鶴さんは視線を泳がせたまま、口ごもってしまふ。

駄目だ、このままじゃ埒があかない。かと言ってさっきの繰り返しはさせたくない。

よし！俺も男だ、ここは一発決めてやるぜ！（一発って何をだ？）

「千鶴さん！」

声の大きさは上げずに、さっきよりも強い口調で千鶴さんの名前を呼びながら俺は千鶴さんの身体を少しだけ離れた。自分がより動けるように。

「耕一さん……」

千鶴さんは潤んだ瞳で俺を見つめている。そして、その頬には、まだ涙の痕が見えた。

俺は手をそっと千鶴さんの頬に当てて、その涙の痕に触れながら彼女を優しく見つめ返す。

「……………」

千鶴さんは何も言わない。ただ俺を見つめるだけだ。そして、俺も。

しばらくして、千鶴さんがそっと瞼を閉じる。

心なしか千鶴さんの方が小刻みに震えていたが、そんな仕種がどこか少女らしさを感じさせて、俺にはいとおしくてたまらなかった。

俺はゆっくりと顔を千鶴さんに近づけて行き、そっと唇を重ねた。

「ん……………」

言葉にならない言葉が千鶴さんの口からかすかに漏れる。あえて説明する必要もないのだが、俺は今、あの千鶴さんとキスをしているのだ。……って、それくらいのことを大袈裟に語ると、うぶな童貞少年みたいに思われるかも知れない。だが、こんなに可愛らしい千鶴

さんと：唇を重ねるなんて思ったら百戦錬磨のつわものですら、うぶな少年のようになってしまはずだ——と言うくらいに魅力的なのだ。

もつとも、いくらうぶな少年のようになったとしても、俺の身体は立派なおトコ。そのおトコの部分が如実に反応してしまう。

やばい。

このままでは本当に行き着くところまで行ってしまいそうだ。……しかしだな、行き着くところまで行ってしまつて、何か問題でもあるのか？

…責任取つて、結婚とか？

俺も千鶴さんも柏木だから、姓は変わらないし。

梓はともかく、楓ちゃんや初音ちゃんは今までだって妹のようなものだったし。

大学は辞めたんだから、あつちにずっと住むことに決まつてんだし。

何も変わらない？ ……つてことは特に問題はないよな、別に。

両親なんてのはお互いにはいないんだから、あとは鶴来屋関係者だけか。

つて、俺は一体何を考えてるんだよ…。今はそんな余計なことを考えてる場合じゃないだろ？

唇をそつと離して千鶴さんの様子を見ると、千鶴さんは相変わらず目を閉じたままじつとしてる。ただ、さっきに比べると方の震えはなくなつてる。

とにかくこうしてても埒があかないので、まずは行動あるのみ…だ。

「千鶴さん……」

俺の声に千鶴さんの肩が少しだけピクツと動いた。それでも、目は閉じたまま大きな動

きはない。

どうしよう…、やっぱりこれ以上女性を焦らしちゃいけないよな…。そもそもこんな風に俺がはつきりしないから、千鶴さんを泣かせちゃったんじゃないか。

そ、そうだぜ。

やっぱり好きな女の人を泣かすような真似はいけないんだよな。

だから、俺はこの場合はやるしかないんだよな。

うんうん、そうなんだよ。これは俺の欲望なんかじゃなくて、千鶴さんを悲しませたくないって言う純粋な気持ちなんだ。決して邪まな思いじゃないんだ。

「俺……千鶴さんのこと、大事にするよ……」

言った。

言っちゃまった。

もう後には戻れないぜ、柏木耕一。

「耕一さん…それって……」

千鶴さんも目を開いて、まっすぐに俺を見つめている。

「そのままの…意味さ。俺は千鶴さんと一緒にいたい……」

いやまあ本音は四姉妹全員と一緒にいたいんだけどね。それでも、千鶴さんと一緒にいると言うことは必然的にそうなるわけだから、それを追求するのは野暮ってもんだ。

「…わかりました」

千鶴さんがゆっくりとうなずきながら、そう言った。そして、千鶴さんの両手がスッと俺の体に回された。

千鶴さんがそつと俺の胸にその顔を埋めるように寄り添って…。

「でも……」

千鶴さんが小さくつぶやいたが、俺はもはやそれどころじゃない。今すぐにも押し倒したい衝動を必死にこらえているんだから。

「ち、千鶴ちゃん！」

完全に俺の声は裏返ってた。…無理もない。俺の胸に甘えるような仕種をされてるんだぜ、あの千鶴さんに。この状況で落ち着いていられる男がいるはずがない！

いかん、もう限界……このまま一気に行くか？

と俺が動き出そうとした刹那、千鶴さんは顔を上げて微笑みながら、

「浮気は許しませんよ」

そう言ったのだ。

そして次の瞬間に、俺の体は完全に硬直してしまった。さらに付け加えると爆発寸前だった俺の思い（正確には体の一部）も、急速に凍りついていった。

「いいですね？」

硬直した俺に対して返事を促すように千鶴さんが尋ねてくるが、確かにその仕種もすごく可愛いと思う。

なのに、俺の口からは何も出てこない。

「耕一さん、答えてくれないんですか？」

困ったような表情を見せる千鶴さんの表情はやっぱり素敵だった。ただ一点を除いては。その時の千鶴さん、確かに表情は笑っていたし仕種は可愛いのだが…目が…目だけ

が……狩猟者モードになっていた……。

「千鶴さんの瞳って、いつ見ても綺麗だね……」

俺がようやく言葉絞り出すと、千鶴さんはふと寂しそうな表情を見せた。

「耕一さん、エルクウの力って知ってますか？」

「大体は知ってるつもりだけど……」

段々普通に話せるようになってきたのか、今度は俺の言葉もすらりと出た。

「…完璧とは行かないようですね、耕一さんは」

が、千鶴さんはさらに悲しそうな表情を見せたりする。ま、それでもまだ目は狩猟者のままだ。

「千鶴さん？」

「……エルクウは精神感応で意思を伝えるんですよ、耕一さん」

え？

それは知ってたけど、まさか……。

「そのまさかです」

げっ！

「さっきから耕一さんの考えてることは……」

ち、千鶴さん、それは……。

「はい、筒抜けです」

ウソだろー！

「本当です」

ええ？ 本当だった？ ああ、こりゃいちいち喋らなくてもいいから楽でいいね〜  
じゃなくて！

「ですから、先ほどの……」

さっきって？

「わたしのこととか……」

う……すぐはるかしーじゃないか。

「わたしもです……。耕一さんがあんなこと考えてたなんて……やっぱり耕一さんも男の人な  
んですね」

当然でしょ、千鶴さん……。

「そ、そうですね。でも、アレはなんですか？」

アレって？

『「いやまあ本音は四姉妹全員と一緒にいたいんだけどね」  
げげげっ！

千鶴さん、そんなに人の心を読んじゃだめだよ……。

「違います！ さっきからずーっと耕一さんの方がわたしに意思を送ってるんですよ」

へ？ 俺が？

「そうです。それもかなり強く。だから、もしかすると……」

強く？

で、もしかすると、何？

「それは……」



と、その時。

玄関のドアをたたく音が俺の耳に届いた。そして、ドア越しに声。

「おい、バカ耕一！ アンタ一体千鶴姉と何してるんだ！」

「耕一さん、千鶴姉さんと一緒なんですか？」

「耕一お兄ちゃん……一緒は嬉しいけど、浮気はよくないよお……」

一番やかましい梓はともかく、楓ちゃんも梓に負けてないぞ……。それにしても初音ちゃん、浮気って君ねえ……。

「耕一さん、ここははつきりさせるしかないですね」

俺のかたわらでは千鶴さんが。狩獵者モードの赤い瞳が魅力的。

玄関からは梓が、楓ちゃんが、そして初音ちゃんが。

「千鶴姉、何をはつきりさせるって？」

一番乱暴な梓がまず最初に上がってきた。その目は狩獵者モード。

「耕一さんはわたしと約束したんですよね？」

二番目に楓ちゃん。涙ぐんでいるが、その目はやはり狩獵者モード。

「わたしは……ずっと一緒なら嬉しいな」

三番目には初音ちゃん。少し恥ずかしそうにしてるけど、これまた目は狩獵者モードだったりする。

そう言えば楓ちゃんと初音ちゃんのは初めて見るじゃないか。こりゃ、凄いな。四姉妹揃いも揃って、大出血サービスってなもんだね？

「この馬鹿耕一、何笑ってるんだよ！」

はははっ、梓が何か言ってるけどさ、そんなどうでもいいや…。

「耕一さん！」

このセリフだけじゃ分からないだろうけど、これは楓ちゃんなんだ。その仕種は可愛いくてたまらないんだ。

「そ、そんな…可愛いだなんて…恥ずかしいです」

ほら。顔を赤らめて…やっぱ可愛いじゃないか。

「耕一さん！」

今度は千鶴さんだけ。楓ちゃんと千鶴さんはセリフだけじゃ違いがあまりないから分りにくいかも知れないけどな。

「何言ってるんですか、耕一さん…」

垂れ気味の目がさらに下がって、なんて言っちゃ悪いかな。でも、そんな千鶴さんも可愛いよね。

「だ、だから、そんな、可愛いとか…」

照れてる照れてる。その辺が可愛いってんだてば。

「そんな……」

やっぱ俺は千鶴さんらぶらぶだよ。

「え！」

「耕一…アンタ本気？」

「そんな……」

「耕一お兄ちゃん…」

と、四姉妹の反応が見事に別れた直後。

俺の唇に、そっと何かが触れる感触があった。

「ち、千鶴姉！」

梓のヤツが何か叫んだみたいだけど、何だっつてんだ？

あれれれれ？

千鶴さんが俺の目の前にいるぞ？

…っつてことは？

「千鶴姉さん、ずるいです！」

「お姉ちゃん…いいなあ…」

楓ちゃんと初音ちゃんがそんなことを言ってるし、これっつてやっぱり…。

「耕一さん、もう後には引けませんよ？」

千鶴さんの駄目押しの一言。

っつて、そうか、そうだよな…。俺っつて、やっぱり千鶴さんとキスしてんだよな？ てこ

とは？

「だから、もう…」

千鶴さんの声が気のせいかな遠くなっている。

「耕一い、アンタ本気？」

梓の怒鳴り声も。

「耕一さん！」

楓ちゃんのすがるような声も。

「耕一お兄ちゃん……」

泣きそうな感じのする初音ちゃんの声も。

何もかも遠くなっている…。

もう、駄目だな……。

そうして、俺は自分がどこかに行ってしまう感覚の中、唐突に世界は真っ暗闇に閉ざされた。

…もう、何も考えたくない……あ、でも、そうだ。これだけははっきりしておかないといけないな。

千鶴さんらぶりい、だぜ。

……

「そ、そんな…耕一さん……嬉しいですよ」

「コラ、千鶴姉！ いい年してぶりっ子（死語）すんじやなくい！」

（了）

後書き

『エルクウ・キラール』 §5 分岐A、千鶴編

コメント(1998/04/20)

と言うことで、千鶴編の書き直し版です。

どうもオチがいまいち落ちてないような気がするんですけど、あれこれと書き連ねてみてもあまり変わらなかったの、この形に落ち着きました。

で、言いたいことは？ いや、やっぱり「千鶴さんらぶりい」と言うことでそれだけです、ハイ。

副題の「欺瞞」ってのも、結局どれを指すのかよく分からないままかな？ とは思ったのですが、それはそれ。その言葉自体は千鶴さんのことですから。

まだ面白味に欠ける部分が多いな〜と我ながら自分の力量不足を感じております。

追加コメント(1999/07/28)

書式統一の改訂です。

1997/-/-/- 初版 a s h

1998/04/20 二版 a s h

『エルクウ・キラース 5 A 千鶴編』

1999/07/28 改訂 a s h  
2001/06/24 改訂 a s h  
PDF書式変更:2016/05/22